

ダニエルの書 - 第一百七十一号

地政学のチェス：バチカン、共産主義、そして世界支配の追求

Jeff Pippenger

2024-04-01

『The Keys of This Blood: The Struggle for World Dominion Between Pope John Paul II, Mikhail Gorbachev, and the Capitalist West』はマラキ・マルティンによって著され、1990年に初めて出版された。マルティンは、20世紀後半の世界政治および外交における変革的存在としての教皇ヨハネ・パウロ二世の役割を考察している。彼はまた、東ヨーロッパにおける共産主義の崩壊において教皇が果たした役割について論じている。本書は、1989年の終わりの時におけるダニエル書第11章40節の成就をもたらした力学について、カトリックの視点を提示している。

マルティンは、ミハイル・ゴルバチョフの指導下にあるソビエト連邦の内部力学を分析し、とりわけゴルバチョフの「グラスノスチ」（開放）と「ペレストロイカ」（再編）の政策に焦点を当てる。彼は、ソ連が直面している課題と、共産主義体制を改革しようとするゴルバチョフの試みについて論じる。さらに、ソビエト連邦（南の王-竜）、カトリック教会（北の王-獣）、そして彼が資本主義の西側（北の王の代理軍-偽預言者）と呼ぶ勢力の間での地政学的緊張と権力闘争を掘り下げる。冷戦時代を特徴づけたイデオロギーの対立、スパイ活動、秘密工作について論じ、世界の未来を形作ろうとするさまざまな主体の取り組みを検討する。

マーティンは、世界政治と外交において力を持つ存在としてのカトリックの重要性を強調している。彼は、教皇ヨハネ・パウロ二世の指導の下、カトリック教会がこの時期の歴史の進路を形づくり、冷戦の行方に影響を与えるうえで決定的な役割を果たしたと主張する。彼は、ポルトガルのファティマにおける聖母出現という文脈の中にヨハネ・パウロ二世の影響力を位置づけ、ファティマが世界の出来事に及ぼした影響と、歴史の進路を形づくるうえでのカトリック教会の役割を指摘している。マーティンは、ファティマでの出来事が、とりわけ冷戦期の文脈において、重要な預言的意味合いと地政学的含意を持つと示唆している。

マーティンは、1917年にファティマで聖母マリアが三人の若い羊飼いの子どもたちに告げたとされる「ファティマの三つの秘密」を探究している。彼は、当初バチカンによって秘匿され、2000年になって初めて公開された第三の秘密には、カトリック教会と世界の将来に関する終末的な警告が含まれていたと示唆する。マーティンは、聖母の出現や聖母マリアが伝えたメッセージを含むファティマでの出来事が、冷戦期の世界政治および共産主義と資本主義の対立に重大な影響を及ぼしたと主張する。

マーティンは、ファティマの預言の成就における重要人物として、教皇ヨハネ・パウロ二世の役割を強調している。彼は、ヨハネ・パウロ二世がファティマの第三の秘密に言及されている「白い衣を着た司教」と自らを見なし、自身の教皇職を、悪の勢力に立ち向かい、カトリック教会内および社会全体における霊的刷新を促進するための使命と捉え

ていたと示唆している。

マーティンは、ファティマのメッセージは、霊的な戦いの重要性と、カトリック教会の内外にある悪の勢力に立ち向かう必要性を強調していたと示唆している。彼はまた、ファティマでの出来事が、現代世界で人類が直面する課題を理解し対処するための霊的かつ道徳的な枠組みを与えたと主張している。ファティマのメッセージは、間もなく到来する日曜法の際にサタンがキリストに「なりすます」とき、カトリックにサタンをキリストとして受け入れさせるよう条件づける悪魔的なメッセージを表している。

サタンは地に住む者たちを欺くために奇跡を行う。心霊主義は、死者に成りすまして現れさせることによってその働きを行う。神の警告のメッセージを聞くことを拒む宗教団体は、強い欺きに陥り、聖徒たちを迫害するために世俗権力と結束する。プロテスタントの諸教会は、神の戒めを守る民を迫害するにあたり、教皇権と連合する。これこそが、人々の良心の上に霊的な専制を敷くことになる大いなる迫害の体制を構成する力である。

『彼は子羊のように二本の角を持ち、竜のように語った。』神の子羊に従う者だと公言しながら、人々は竜の霊に染まってしまう。彼らは柔和で謙遜だと称するが、サタンの霊をもって語り、立法し、自らの行為によって、自分たちの公言とは正反対の者であることを示している。この子羊のような権力は、神の戒めを守り、イエス・キリストの証を持つ者たちに戦いを仕掛けるにあたり、竜と結びつく。そしてサタンはプロテスタントと教皇派と連合し、この世の神として彼らと歩調を合わせ、人々に命令を下す。あたかも人々が自らの王国の臣民であり、自分の思いのままに取り扱われ、統治され、支配されるべきものであるかのように。

人々が神の戒めを踏みにじることに同意しないなら、竜の霊が露わになる。彼らは投獄され、評議会に引き出され、罰金を科される。「彼は、小さな者も大いなる者も、富める者も貧しい者も、自由な者も奴隷も皆、右の手か額に刻印を受けさせる」[Revelation 13:16]。「彼には獣の像に命を与える力があり、その獣の像が語り、また獣の像を拝まない者は皆、殺されるようにした」[verse 15]。こうしてサタンはエホバの特権を篡奪する。罪の人は神の座に着き、自分こそ神だと宣言し、神の上に立つかのように振る舞う。『Manuscript Releases』第14巻、162頁。

反キリストはローマ教皇とサタンの双方の象徴である。というのも、ローマ教皇はサタンの地上における代理人だからである。「このようにしてサタンはエホバの特権を篡奪する。罪の人は神の座に着き、自らを神だと公言し、神にまさる者のように振る舞う。」サタンは支配権を握ったとき、世界を完全に掌握し、人々を「自らの王国の臣民であるかのように、思うままに扱い、統治し、支配してよい」と言い渡すつもりである。宗教的な王座から支配するために彼はカトリック教会を作り、政治的な王座から支配するために彼は国際連合を作った。

「異教とキリスト教とのこの妥協は、神に逆らい、神よりも自らを高く掲げる者として預言において前もって告げられている『罪の人』の出現をもたらした。その巨大な偽りの宗教体系は、サタンの力の傑作であり、彼が自分の意のままに地を支配するために自らを王座に据えようとする努力の記念碑である。」The Great Controversy, 50.

ファティマの奇跡とその悪魔的な予言は、サタンが、彼が現れてキリストを装うときにカトリック教会が自らの教会を速やかに彼の支配下に引き渡すことを可能にする、預言的な舞台を整えるために用いてきたものである。彼がキリストを装うことは、間もなく施行される日曜法の時に始まり、それはダニエル書11章16節、22節、31節、41節に表されている。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けるとき、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」『証言』第5巻、451頁。

アメリカ合衆国で日曜法が制定されると、「サタンの驚くべき働きの時が来た」となる。黙示録13章11節では、アメリカ合衆国は竜のように「語る」。そして13節では、すなわちアメリカ合衆国が日曜法を可決して「語る」ときに何が起こるのかを示しており、サタンが現れて天から火を降らせる。

神のしもべたちは、顔は光に満ち聖なる献身の輝きを帯び、天からのメッセージを宣べ伝えるために各地を駆け巡るだろう。地の至る所で、幾千もの声によってその警告が与えられる。奇跡が行われ、病人は癒され、しるしと不思議が信じる者たちに伴う。サタンもまた、偽りの不思議をもって働き、人々の目の前でさえ天から火を降らせる。ヨハネの黙示録13章13節。こうして、地に住む者たちは態度を決めるように迫られる。『大争闘』611、612。

ファティマのメッセージは、一つの奇跡によって確認されたが、その奇跡は、1917年10月13日の奇跡に至るまで、5月から毎月13日に、いわゆる聖母マリアが三人の子供たちを訪れたという主張を反駁する目的でその出来事に立ち会った無神論的政府系新聞によって証言されたものであった。奇跡当時ファティマにいたすべての無神論的報道機関は、その出来事を確認した。それは本物の奇跡であった（サタンによる）。

マラキ・マーティンが著書で指摘したように、教皇ヨハネ・パウロはファティマの聖母への崇敬によって導かれていた。2000年まで明かされなかったファティマの秘密の預言は、もちろん悪魔的な預言であったが、終末にはイエスは初めの時を繰り返す。聖書で最も古い書、モーセが最初に書いた書は『ヨブ記』であり、そこでは、すべての預言が終末において最も完全に成就することから、ヨブが十四万四千人を表しているとされている。『ヨブ記』の物語では、サタンはヨブを試すために、彼に死と破壊をもたらすことを許されている。終末にサタンが行うことを許される奇跡は、本物の奇跡である。それらは悪魔的な奇跡だが、神は、サタンにヨブを試すことを許したのと同じ目的で、サタンがその頂点の業を成し遂げることを許しておられる。

多くの人は、霊的現象を、霊媒による詐欺や手品にすべて帰して説明しようと努めている。確かに、詐欺の産物が本物の現象としてしばしば通用させられてきたのは事実だが、同時に、超自然的な力の顕著な現れもあった。近代心霊主義の発端となった神

秘的なラップ音は、人間的な策略や狡知の結果ではなく、悪天使の直接の働きであり、こうして魂を滅ぼす最も成功した欺瞞の一つが導入されたのである。心靈主義は単なる人間の詐欺行為にすぎないと信じることによって、多くの人が罠にかかるだろう。超自然的と認めざるを得ない現象と直面するとき、彼らは欺かれ、それを神の大いなる力として受け入れるよう導かれてしまうだろう。

こうした人々は、サタンとその手先によって行われた驚くべき業についての聖書の証言を見落としている。ファラオの魔術師たちが神の業を偽って再現できたのは、サタンの助けによってであった。パウロは、キリストの再臨に先立って、同様のサタンの力の現れがあると証言している。主の来臨に先だって、「サタンの働きによって、あらゆる力としるしと偽りの不思議、また不義のあらゆる欺きをもって」行われることが予告されている。テサロニケ人への第二の手紙 2:9, 10. さらに使徒ヨハネは、終わりの日に現れる奇跡を行う力について記し、次のように述べている。「彼は大いなるしるしを行い、人々の見ている前で、天から火を地上に降らせる。また、彼に与えられた力によって行うその奇跡によって、地に住む者たちを惑わす。」ヨハネの黙示録 13:13, 14. ここで予告されているのは、単なるいかさまではない。人々は、サタンの手先たちが実際に行う力をもって成し得る奇跡によって惑わされるのであって、彼らが行うふりをする奇跡によってではない。大争闘、553.

マラキ・マーティンの著作におけるファティマのメッセージは、教会内部の闘争に関連して、終末の時代におけるカトリックの預言的構造として描かれている。その闘争は、「善い教皇」と「悪い教皇」あるいは「保守的な教皇」と「リベラルな教皇」という対立として表現される。保守的な、そしてマーティンの奇跡の解釈によれば「善い」教皇は、第一バチカン公会議（バチカンⅠ）に基づいて自らの理解を築いている。この公会議は1869年12月8日から1870年7月20日まで開催され、ピウス9世によって招集され、主として教皇不可謬性の教義の定義と、当時カトリック教会が直面していたさまざまな神学的・教義的問題への対処に焦点が当てられた。第二バチカン公会議（バチカンⅡ）はそれよりはるかに後の1962年10月11日から1965年12月8日まで開かれ、ヨハネ二十三世によって招集され、彼の死後はパウロ六世によって継続された。

マーティンの言うところの「カトリックの最後の日々」は、第一次バチカン公会議で定められたローマ教皇の不可謬性と首位権と、いわゆる“ウォーク・ポープ”ことフランシスコが現在示し、第二バチカン公会議の文書に表れているリベラリズムとの間の闘争を指し示している。マーティンは、教会を統御するためのこの二つのアプローチをめぐる闘争のさなかに第三次世界大戦が勃発し、イエスが再臨して地上に降り、善き教皇に祝福を与えてカトリック教会の玉座に就くのだと示唆している。

ダニエル書十一章十三節から十五節において、十六節の日曜法に直前する歴史は、代理戦争の第三にして最後の戦いを描写している。それは、十一節と十二節におけるプーチンの勝利に続く戦いであるが、その三つの節の間にある十四節は、カトリック教が終末の歴史へと入り込む時を特定している。

イザヤによれば、聖書預言の第六の王国の象徴的な七十年の統治の間、ローマの淫婦は忘れ去られる。教皇制が地上で初めて君臨したのは538年で、その君臨に先立つ道標は533年のユスティニアヌスの勅令であった。

ユスティニアヌスの勅令をめぐる歴史は、ユスティニアヌスが、王国で混乱を引き起こしていた宗教論争に終止符を打つことによって、自らの王国支配を強化しようとしていたことを示している。その論争とは、東のコンスタンティノーブルの教会と西のローマの教会のいずれが、いわゆるキリスト教会の頭であるかというものだった。第十三節では、アメリカ合衆国の最後の大統領が、ユスティニアヌスの先例に倣わざるを得なくなるような論争に直面し、権力を固めるために必要な政治的支持を確立するため、カトリック教会が諸教会の長であり、異端の矯正者であると宣言することになる。

私たちはファチマの悪魔的な予言にいささかの信頼も置くべきではないが、神の言葉に明らかにされていることを見なければならぬ。20世紀の始めに、地の獣の二つの角はいずれも第三世代、すなわち妥協の世代へと入った。共和主義の角は、その金融制度を国際銀行家たちに明け渡したが、彼らの起源は赤い盾の家系、すなわちロスチャイルド家にさかのぼり、イルミナティ、フリーメイソン、秘密結社、イエズス会との神秘的な関係を持っている。ホワイト夫人はこれらの勢力について直接警告している。同時期、プロテスタントの角としてのラオデキア的アドベンティズムは、その教育機関と宗教機関を世の支配に明け渡した。

まさにその時期に、現代の「南の王」の歴史はロシア革命から始まり、現代の「北の王」の歴史はファチマの奇跡から始まる。マラキ・マーティンが自著で強調しているように、善い教皇と悪い教皇をめぐる内部の闘争を超えて、ファチマのメッセージは、一般的には無神論に対するカトリックの闘い、そしてより具体的にはロシアの無神論に対する闘いを示した。1917年に教皇が実行すべきとされた秘密には、(悪魔的な)約束が含まれていた。すなわち、教皇がコンクラーヴェを招集し、ロシアを聖母マリアに奉獻すれば、第二次世界大戦は起こらない、というものである。また、教皇がそれを拒めば、ロシアはその思想を広く行き渡らせ、そしてその結果としてもう一つの世界大戦が起こる、とも示されていた。

第二次世界大戦には、ロシアの共産主義に対するカトリック主義の戦いが含まれていた。その戦争におけるカトリック主義の代理軍はナチス・ドイツであった。教皇制は常に代理軍を用いる。1933年、カトリック教会は、パチェリ枢機卿の働きを通して、アドルフ・ヒトラーと政教協約を締結し、それによってヒトラーがドイツを掌握することが可能となった。そしてヒトラー自身の証言によれば、その契約(政教協約)こそが、ヒトラーにユダヤ人問題を解決することを可能にしたのである。第二次世界大戦において、ナチスは無神論的ロシアに対抗するための教皇制の代理であり、そして今、ウクライナにおいて遂行されつつある代理戦争の第二の戦いにおいても、それは別のナチスの代理軍によって遂行されている。

次回の記事でこの研究を続けます。

靈魂不滅説と日曜神聖視という二つの大いなる誤りを通して、サタンは人々をその欺きの支配下に置くであろう。前者は心靈主義の土台を築き、後者はローマへの共感のきずなを生み出す。アメリカ合衆国のプロテスタントは、深い隔たりを越えて手を伸ばし、心靈主義の手を握ることに先頭に立つだろう。彼らは深淵を越えてローマの権力と手を結び、この三重の連合の影響のもとで、この国はローマにならって良

心の自由を踏みにじるようになるだろう。

心霊主義が現代の名ばかりのキリスト教をますます模倣するにつれて、欺き惑わし、絡め取る力はいっそう強まる。サタン自身も、現代の時勢に合わせて改心したかのように装う。彼は光の天使の姿で現れるだろう。心霊主義を媒介として、奇跡が行われ、病人は癒され、否定しようのない数々の驚異が行われるだろう。そして霊たちが聖書への信仰を公言し、教会の制度を尊重する姿勢を示すので、その働きは神の力の現れとして受け入れられるだろう。

自称のキリスト者と不敬虔な者とを隔てる境界線は、今やほとんど見分けがつかない。教会員は世が愛するものを愛し、世と連合する用意がある。サタンは彼らを一つに結び合わせ、皆を心霊主義の陣営に掃き入れて自らの大義を強めようと決意している。真の教会の確かなしるしとして奇跡を誇るカトリック教徒は、この奇跡を行う力にたやすく欺かれるだろう。真理という盾を投げ捨てたプロテスタントもまた惑わされるだろう。カトリック教徒もプロテスタントも世の人々も等しく、力のない敬虔の形を受け入れ、この結束のうちに、世界の回心と久しく待ち望まれてきた千年王国の到来をもたらす壮大な運動を見出すだろう。

心霊主義を通して、サタンは人類の恩人として現れ、人々の病を癒し、新しく、より高尚な宗教的信仰の体系を提示すると称する。しかし同時に、彼は破壊者として働く。彼の誘惑は大勢を破滅へと導いている。不節制は理性を王座から引きずり下ろし、肉欲への耽溺、争い、流血が後に続く。サタンは戦争を喜ぶ。それは魂の最も邪悪な情念をかき立て、悪徳と血にまみれたその犠牲者たちを永遠へと押し流すからである。彼の目的は、諸国民を互いに戦わせることにある。そうすることで、彼は人々の心を、神の日に立つための備えの働きからそらすことができるからである。

サタンは、備えのない魂を刈り入れるために、自然界の諸要素をも通して働く。彼は自然界の実験室の秘密を研究してきて、神が許される範囲で、その諸要素を支配しようと持てる力を尽くす。彼にヨブを苦しめることが許されたとき、群れや家畜、しもべ、家屋、子どもたちが、どれほどたちまち、一難去ってまた一難と、瞬く間に一掃されたことか。被造物を覆い、滅ぼす者の力から垣で囲むように守っておられるのは神である。しかしキリスト教世界はエホバの律法を侮ってきた。ゆえに主は、ご自身が宣言されたとおりのことをなさる—地から祝福を引き上げ、律法に反逆し、他の者にも同じことを教え、強いている者たちから、その守りの配慮を取り去られる。神が特にお守りにならない者は皆、サタンの支配下にある。彼は自分の企てを進めるために、ある者を優遇して繁栄させ、また別の者には災いをもたらし、それが神の打ちであると人々に信じ込ませるだろう。『大いなる論争』588、589。